報 告 （3）

総合支援課

「熊本市立小中学校 心のアンケート」（いじめ等に関するアンケート）の結果報告について

1 目 的

熊本市立小中学校の児童生徒を対象にして、無記名のアンケート調査を実施することにより、各学校が児童生徒の思いに寄り添い、いじめの実態を把握するとともに迅速・適切な対応を行い、すべての児童生徒が安心して楽しく過ごせるいじめのない学校づくりに取り組むための資料とする。

また、認知された事例をもとに各学校、教育委員会におけるいじめの未然防止、根絶に向けた具体的な対応策を検討・実施する資料とする。

2 調査期間　令和2年11月13日～12月末日（提出日：令和3年1月15日）

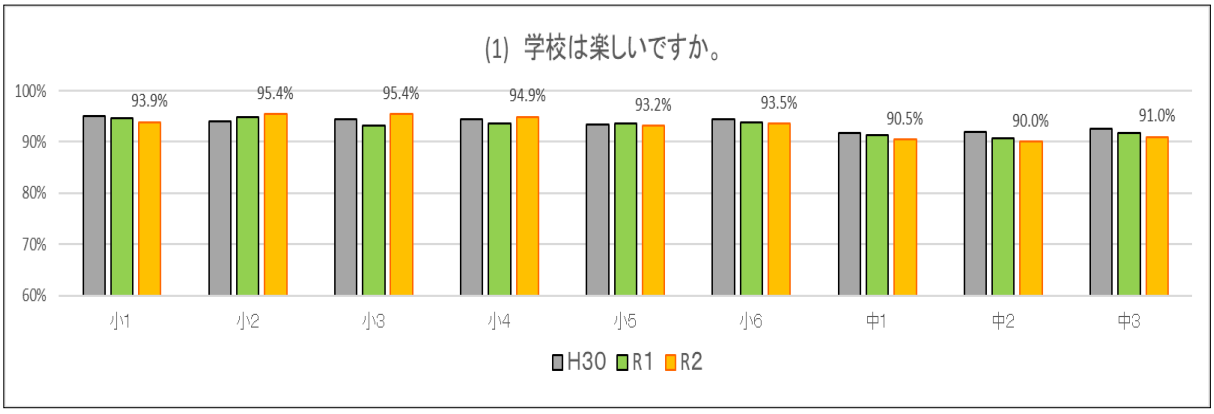
3 調査対象　熊本市立小中学校のすべての児童生徒

（小学生 40188人、 中学生 18296人、 合計 58484人）

4 調査結果と考察

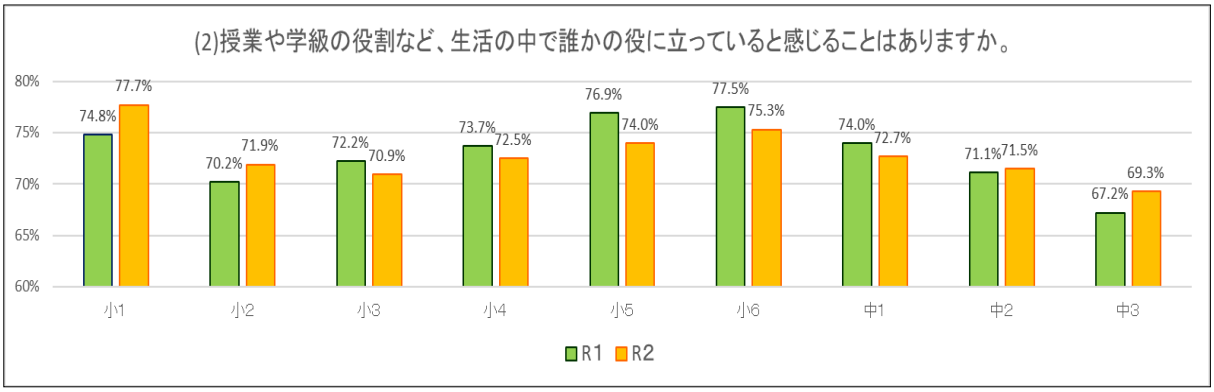
問1 今の気持ちについての質問

(1)学校は楽しいですか。



多くの児童生徒にとって学校は楽しい場所となっている。しかし、「楽しくない」と感じている児童生徒が1割弱おり、その理由としては人間関係や学習面等が考えられる。

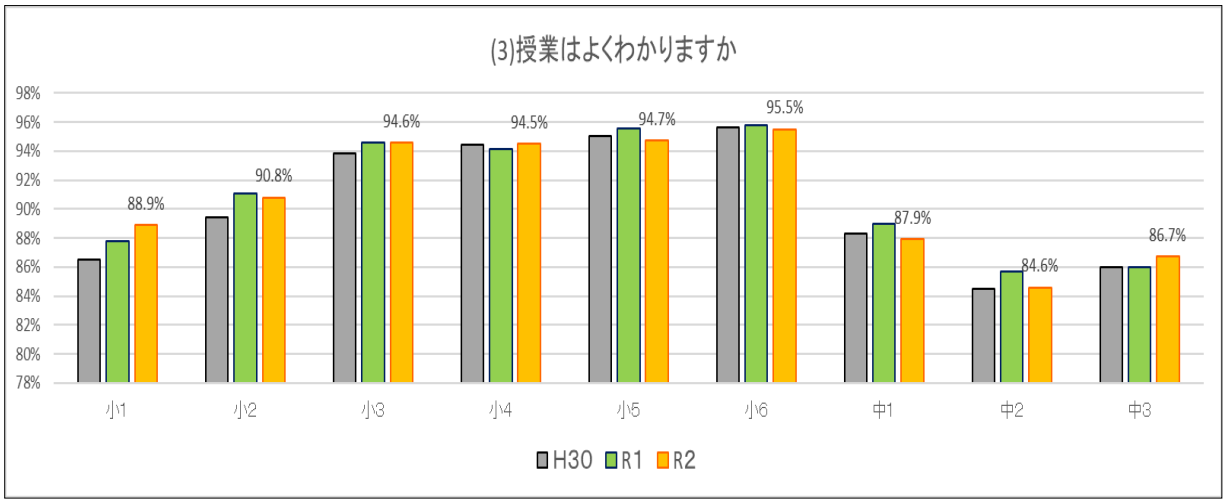
(2)　授業や学級の役割など、学校の中で誰かの役に立っていると感じることはありますか。



小学校では、学年が上がるにつれて自分でできることが多くなり、高学年は委員会活動などで学校の代表としての役割を担うようになるため、役に立っているという実感が高まる。

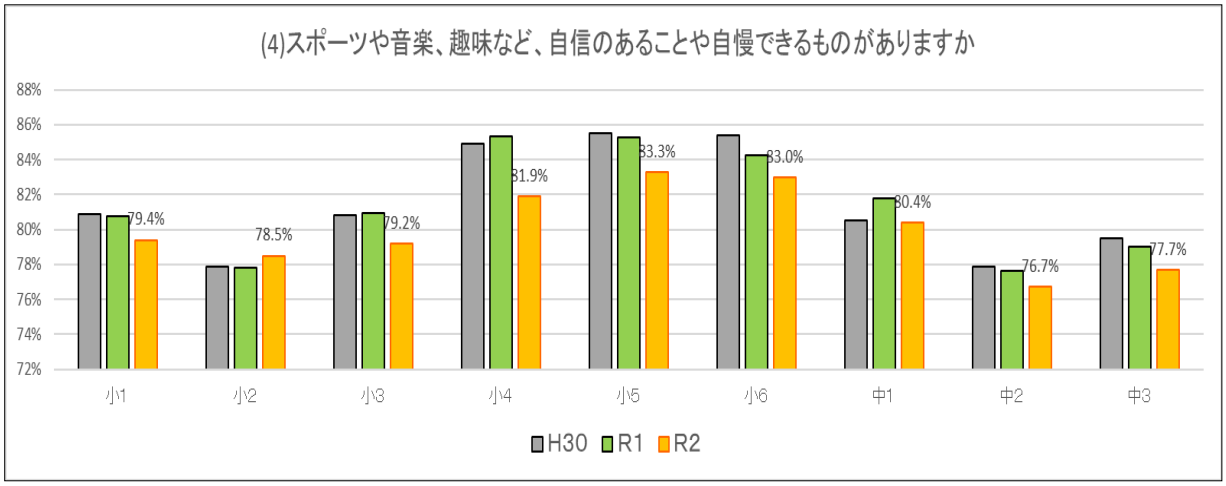
令和2年度は、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、異学年の交流の場が少なくなったことで、小学1年生は6年生の手助けを受けず、自分たちで役割分担して活動することが増えた。その結果、低学年では誰かの役に立っていると感じている児童の増加、高学年では減少につながったと考えられる。

(3)　授業がよくわかりますか。



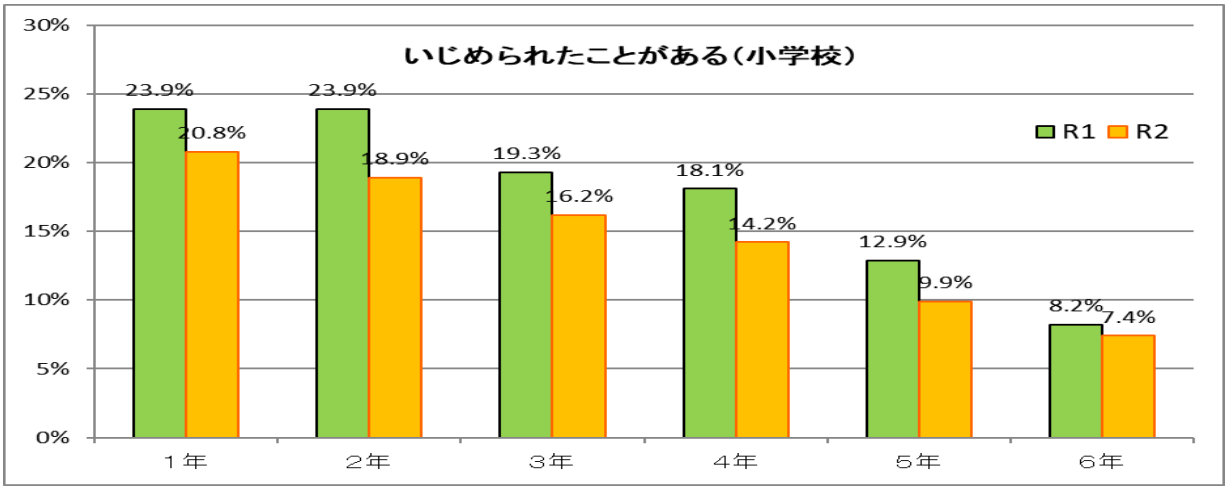
小学校は、学年が上がるにつれて割合が高くなっており、中学校では、2、3年生で割合が低くなっている。中学校では、学年が上がるにつれて学習内容が難しくなるため割合が低くなっていると考えられる。

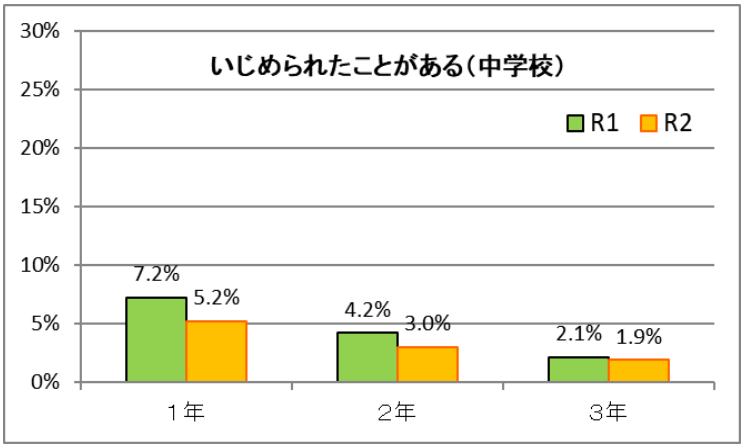
(4)　スポーツや音楽、趣味など、自信のあることや自慢できるものがありますか。



自慢できるものが「ある」、「少しある」と回答した児童生徒の割合は、小中学校とも令和元年度に比べ減少している。新型コロナウィルス感染拡大防止のため、スポーツの大会や文化的な発表会等の機会が大幅に減ったことで、自分の得意なことを生かせる場が少なかったことが影響していると考えられる。

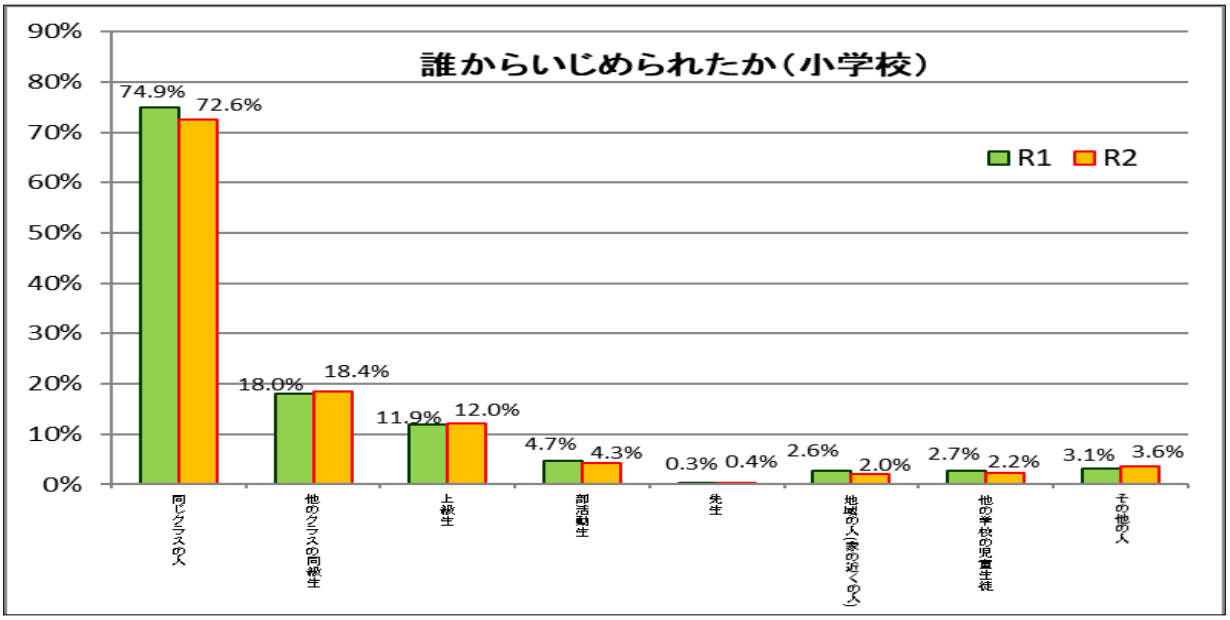
問2　今の学年でいじめられたことがありますか。

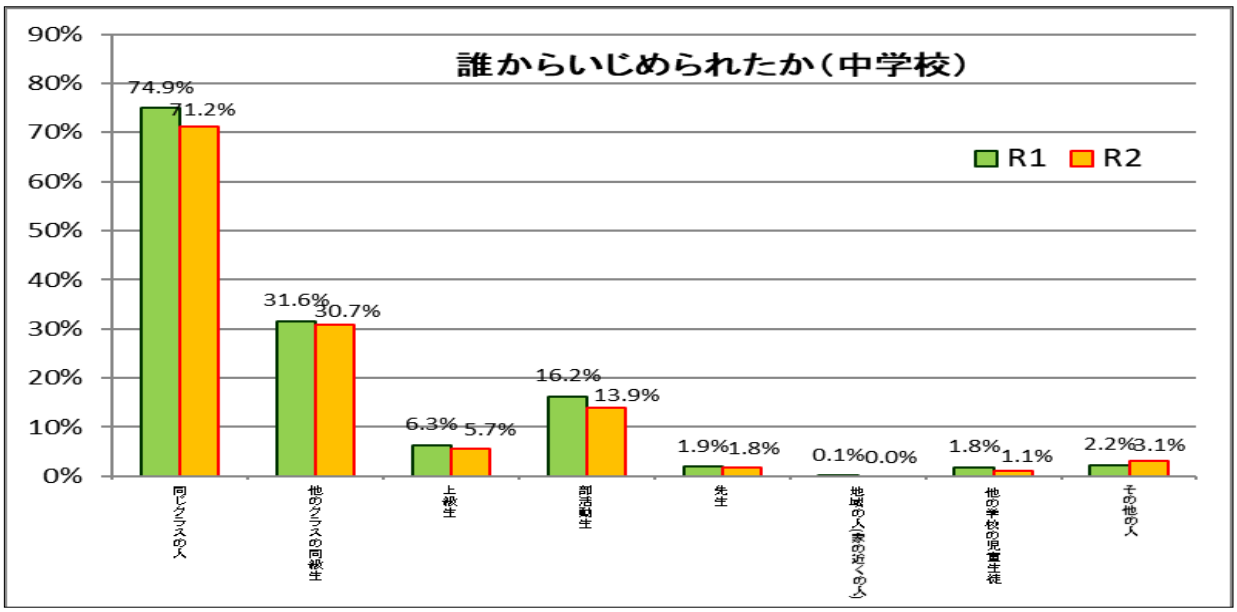




今の学年になっていじめられたことが「ある」と回答した児童生徒は、全ての学年において減少した。令和元年度同様、小学校では１・２年でのいじめの割合が高く、小中学校とも学年が上がるとともに低くなっている。これは、成長に伴ういじめの捉え方や他者との関わり方等の変化が関係しているものと考えられる。

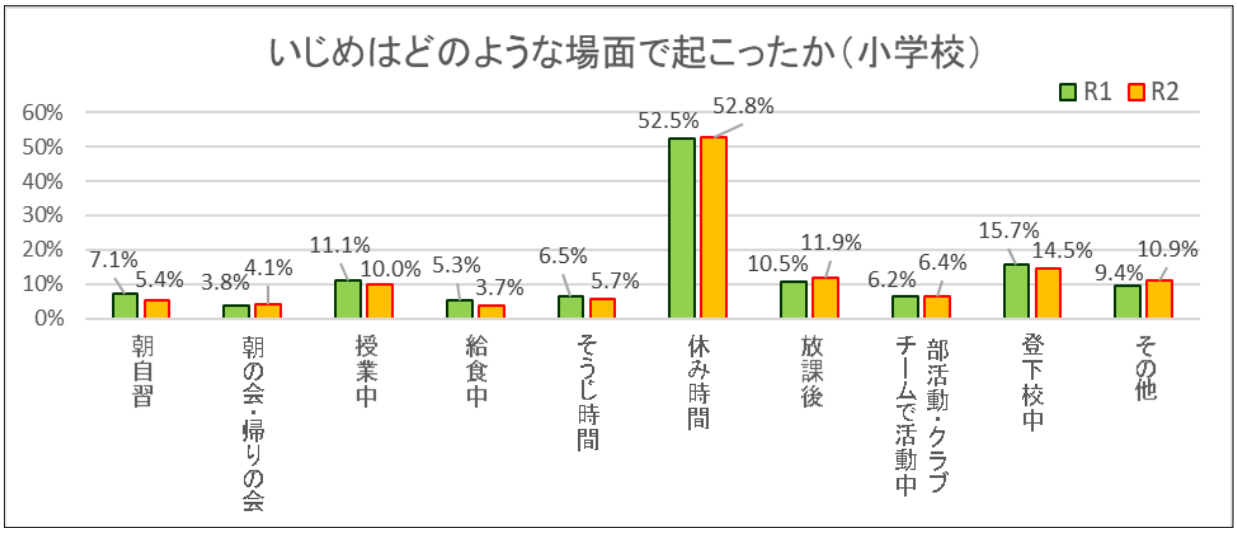
問3　誰からいじめられましたか。（複数回答）

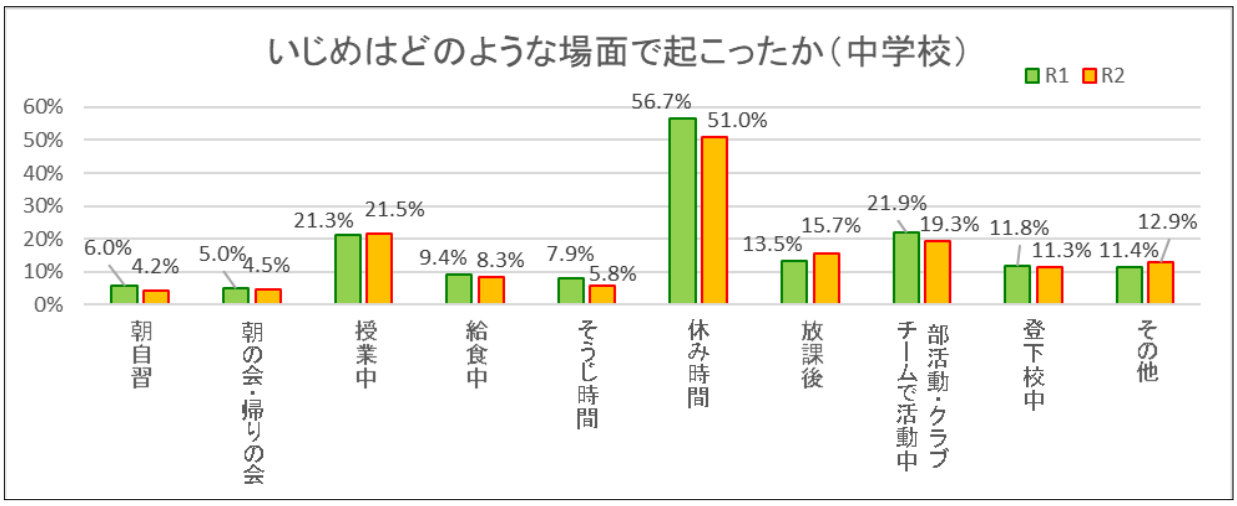




小中学校ともに令和元年度同様「同じクラスの人」からが約7割以上を占め、次いで「他クラスの同級生」となっている。発達段階に応じて児童生徒の人間関係や行動範囲が広がり、その変化が小学校と中学校の違いに表れているものと考える。小学校の「その他」では「下級生」が最も多かった。

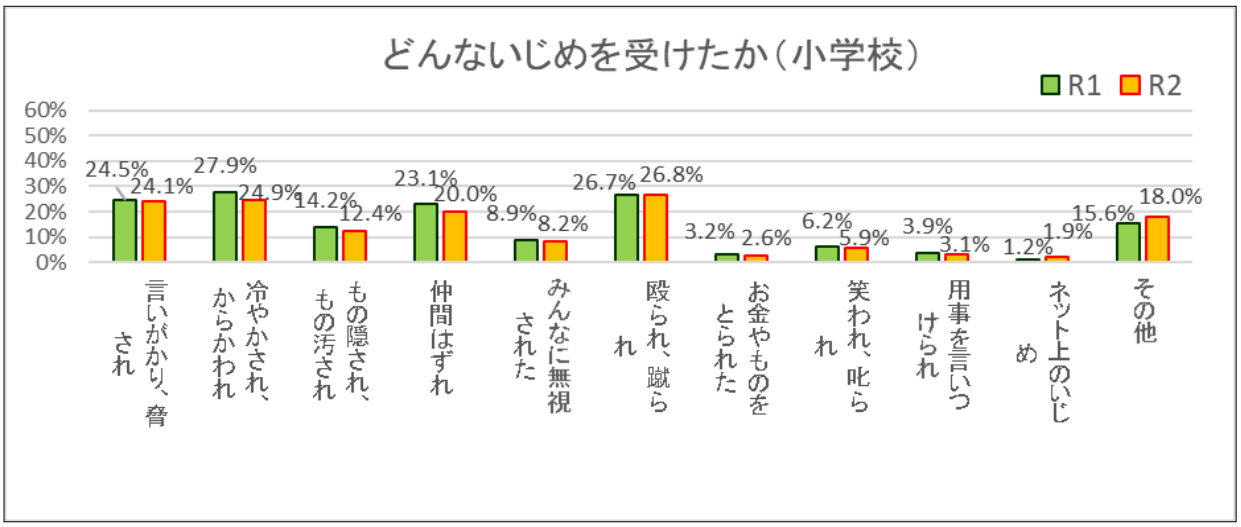
問4　いじめがどのような場面で起こりましたか。（複数回答可）

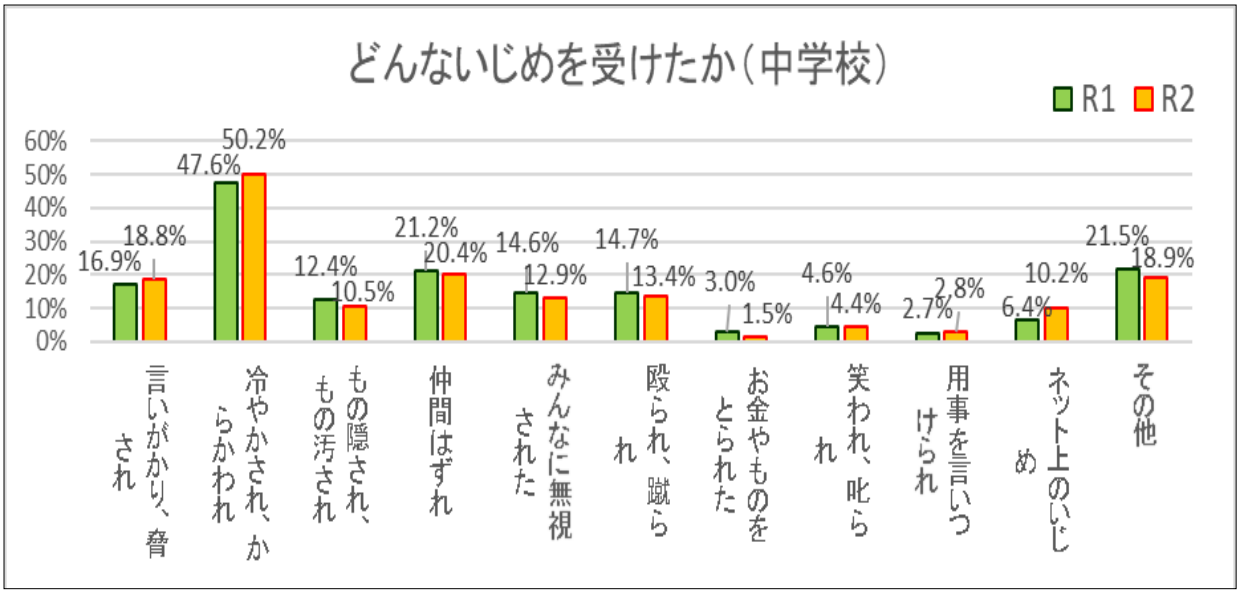




令和元年度同様、教師が見ていない「休み時間」が最も多かった。教師がいる「授業中」「給食中」のいじめは、発言を笑われたり、できなかったことを馬鹿にされたりする等の「冷やかし・からかい」が考えられる。小学校の「登下校中」や、中学校の「部活動・クラブチームでの活動中」、また「その他」では小学校での「育成クラブ」「習い事」、中学校での「SNS 上」等、大人の目が届きにくいところでいじめが起こっていると考えられる。

問5 どんないじめを受けましたか。(複数回答)



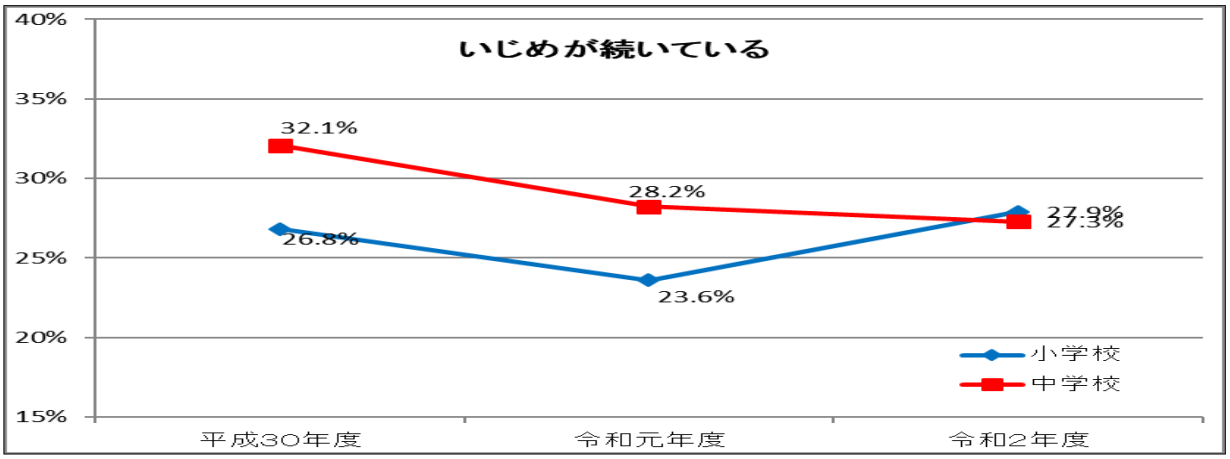


小学校では「言いがかり、脅され」「冷やかし、からかい」「殴られ、蹴られ」がほぼ同じ割合で並んでおり、手足が出たり、友達に対して感情のままに言葉をぶつけたりしていることが多いと考えられる。

中学校では「冷やかし、からかい」の割合が圧倒的に高く、冷やかす側は遊びの延長と思っており、相手を傷つけているという意識が低いと考えられる。

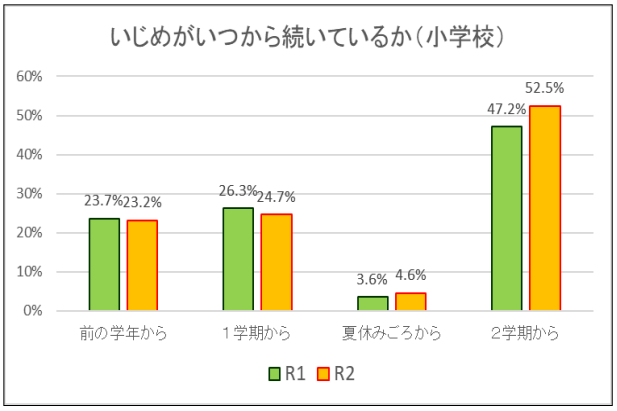
また、小中学校ともにネット上のいじめが増加しており、中学校では昨年より3.8ポイント増加している。

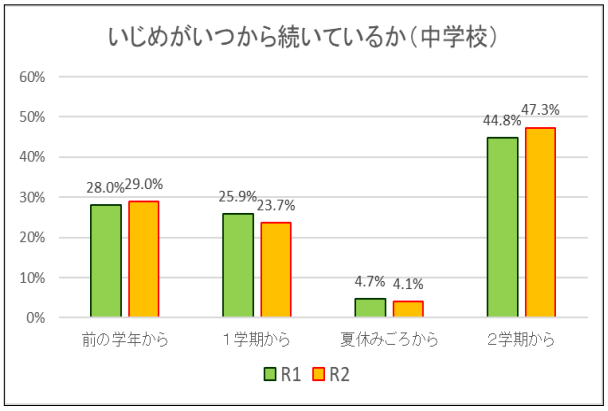
問7　今もいじめは続いていますか。



中学校はいじめが続いている割合が年々減少しているが、小学校は増加に転じている。

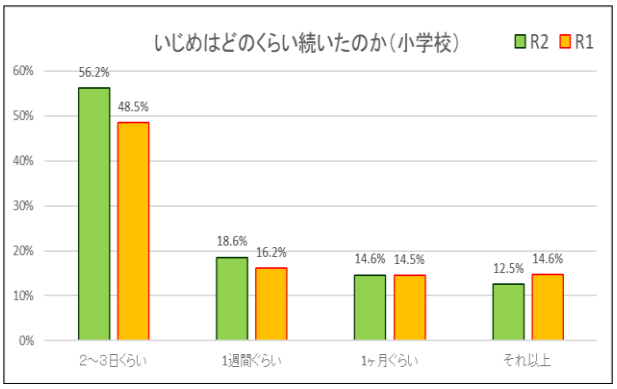
※　いつから続いていますか。【「いじめが続いている」と答えた児童生徒のみ回答】

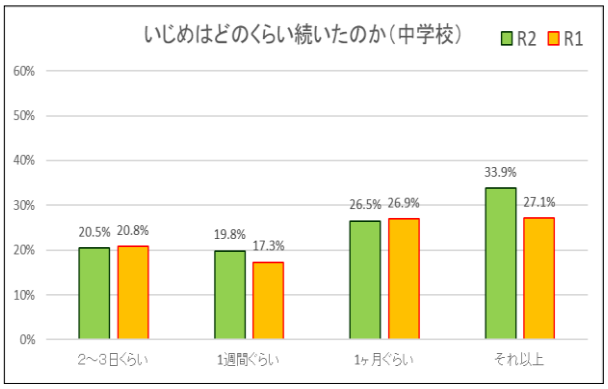


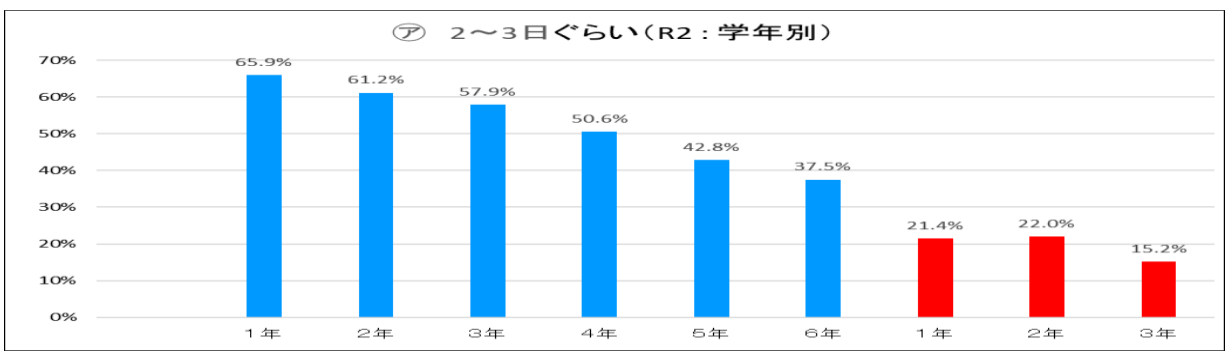


令和元年度とほぼ変わらないが、小中学校とも似たような結果であった。「続いている」と回答した児童生徒のうち、小中学校とも半数近くが「2学期から」と回答しているが、「前の学年から」いじめが続いている児童生徒が3割弱いることは課題である。

※　どれくらい続きましたか。【「いじめが続いていない」と答えた児童生徒のみ回答】

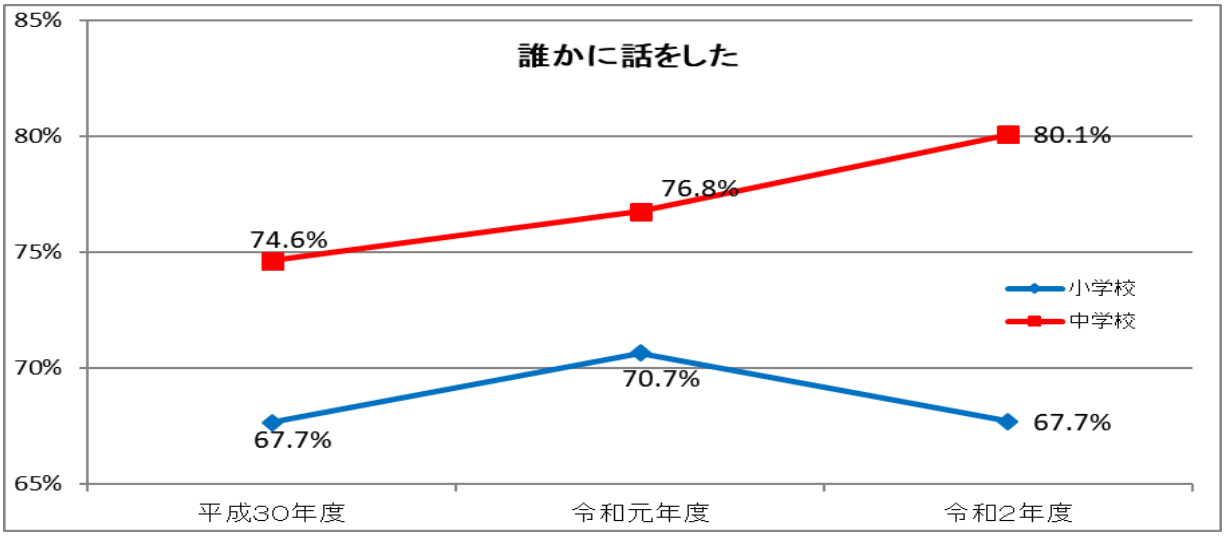






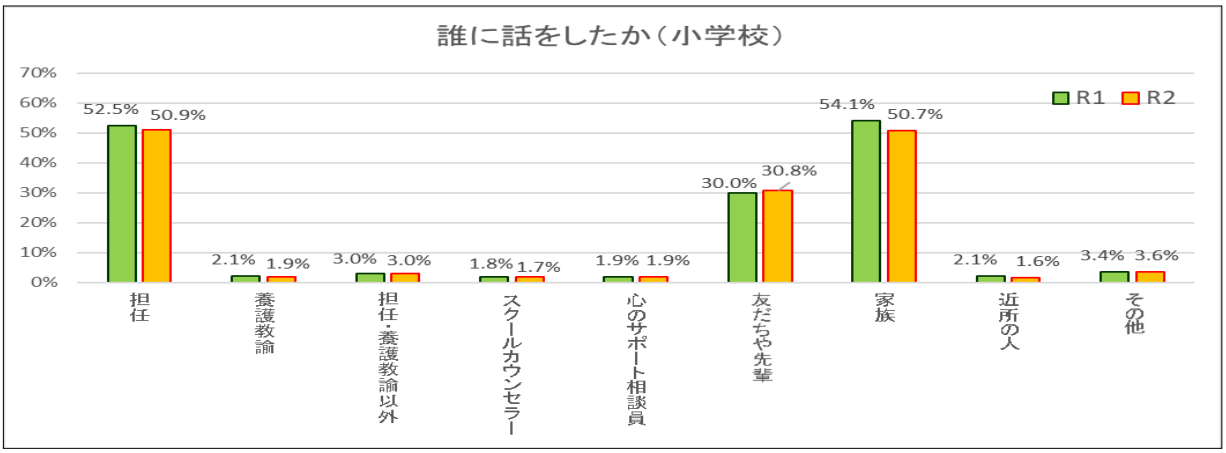
「続いていない」と回答した児童生徒のうち、いじめが続いた期間が「2～3日くらい」「1週間ぐらい」と回答した小学生は7割以上いた。中学生は「1ヶ月以上」「それ以上」が6割以上と高く、小学生と中学生で異なる傾向が見られた。「2～3日くらい」続いたと回答した学年別データを見ると、学年が上がるにつれて減少していることから、学年が上がるにつれて、いじめは長期化していることがわかる。

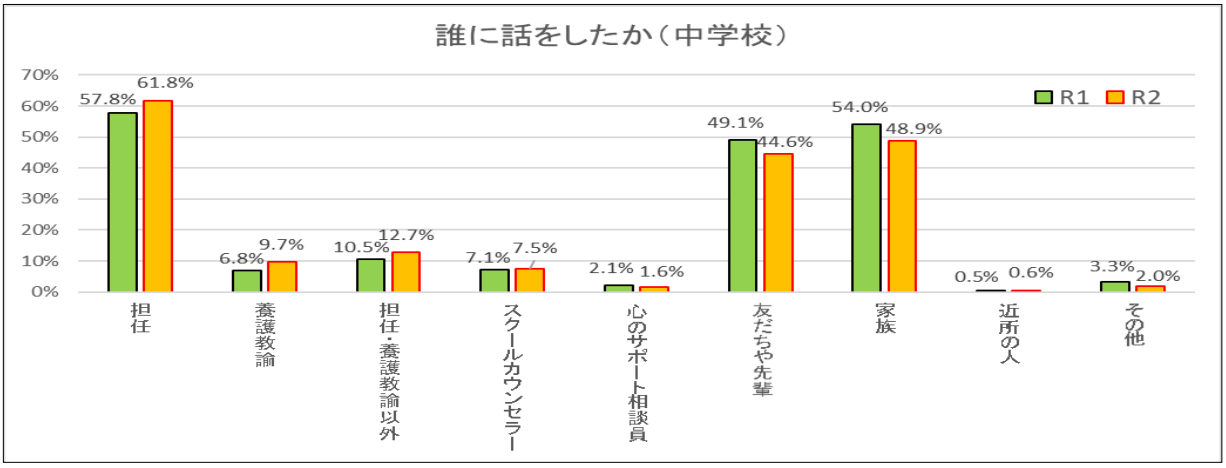
問8 いじめられたことを誰かに話をしましたか。



中学校は「誰かに話した」生徒の割合が増加し、80パーセントを超えた。
小学校では「誰かに話した」児童の割合が減少しており、今年度の課題と捉えている。

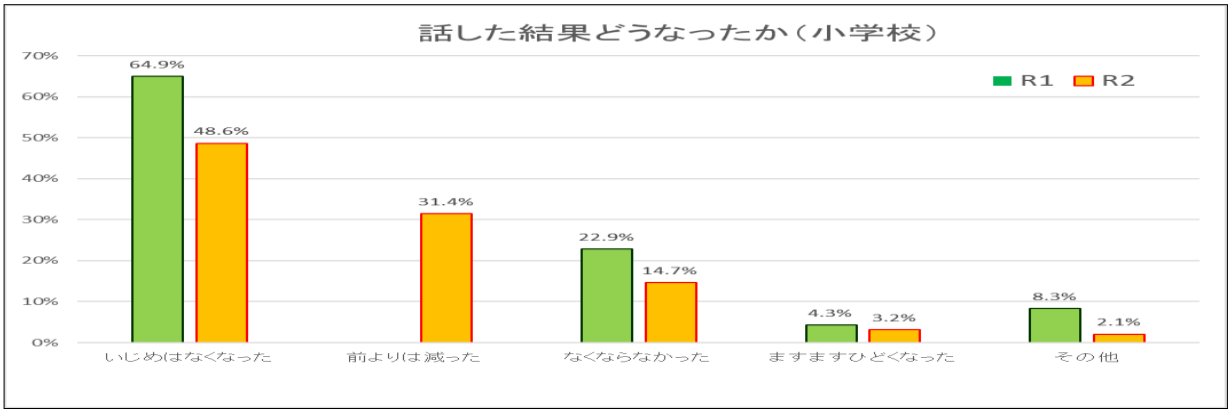
問9 誰に話をしましたか。（複数回答）

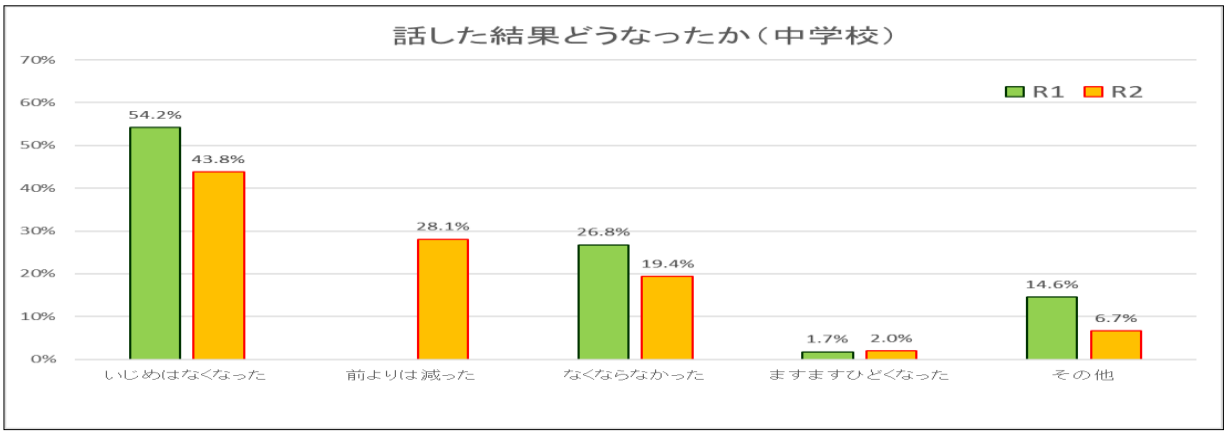




令和元年度同様、話した相手の上位は「担任」、「家族」であった。「担任」は小学校で1.6パーセント減少、中学校は4.0パーセント増加した。教科担任制の中学校では、担任以外の先生にも話しやすく、また中学校にはカウンセラーが配置されていることから、担任以外の学校関係者に相談しやすい環境にあると考えられる。小学校では「養護教諭」「担任・養護教以外の先生」「カウンセラー」に話した児童が少ないため、今後の課題と捉えている。

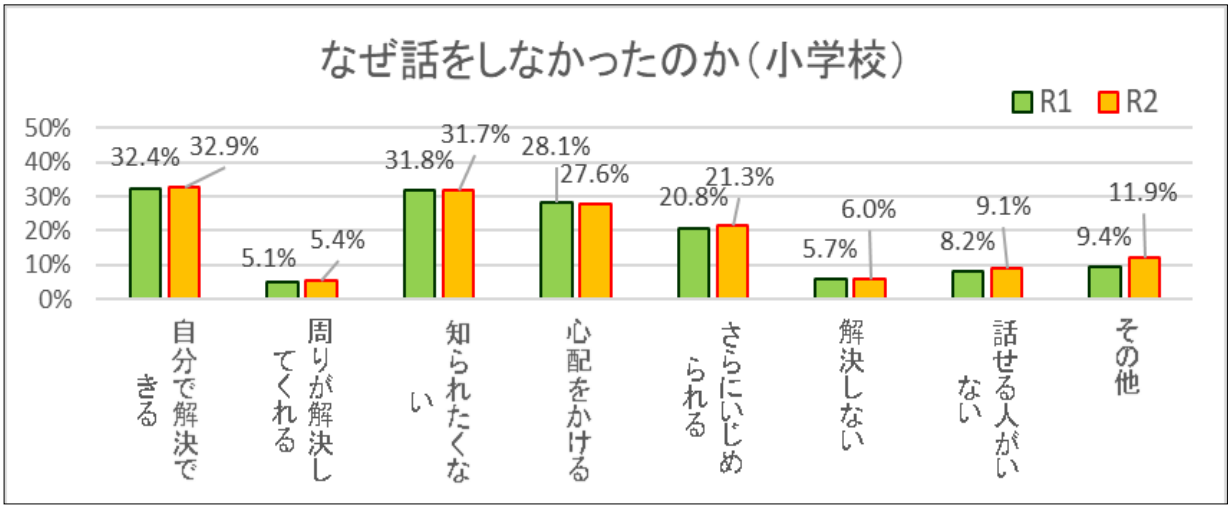
問 10 話した結果どうなりましたか。 <R2 より「前よりは減った」を選択肢に加えた>

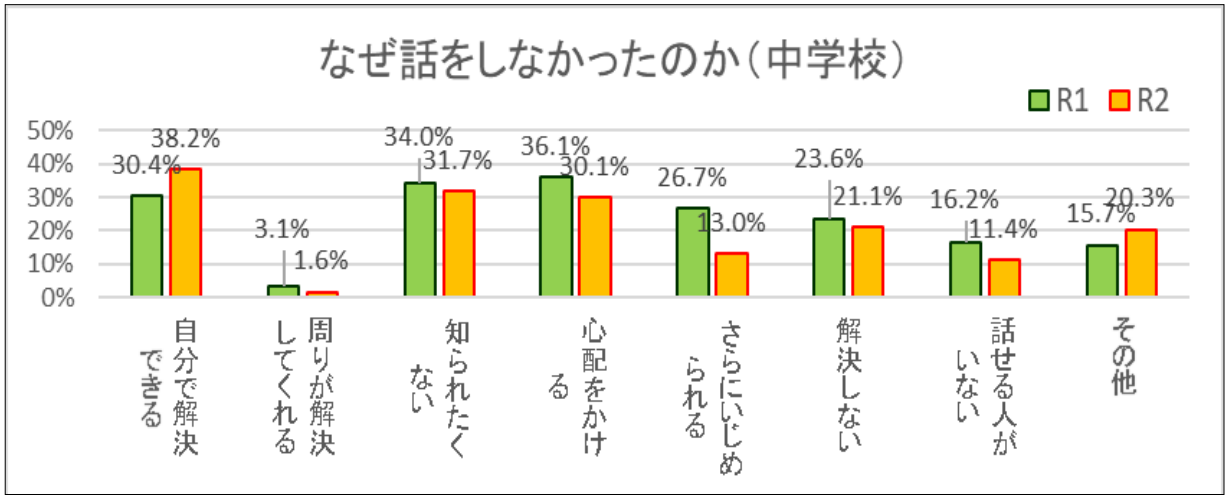




令和2年度から「前よりは減った」という項目を増やした。「いじめはなくなった」「前よりは減った」と回答したのは、小学校では8割、中学校では7割以上が、話したことで好転したと感じている。

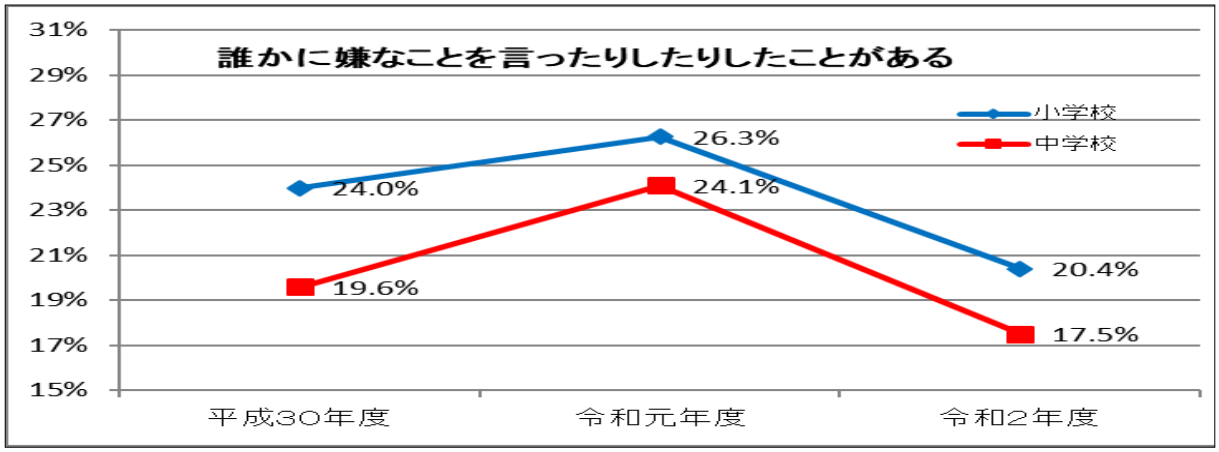
問 11 なぜ話をしなかったのですか。（複数回答）





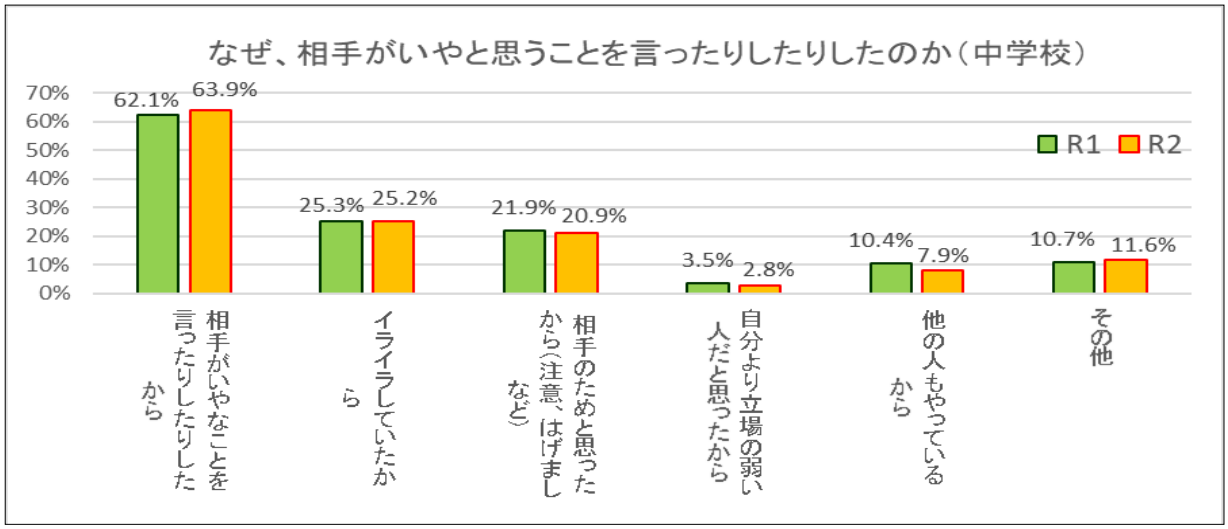
小中学生とも上位は「自分で解決できる」「知られたくない」「心配をかける」となっている。また、「話せる人がいない」と回答した小学生が9・1%で令和元年度よりも0．9ポイント上昇し、中学生は 11.4%で4．8ポイント減少している。中学校では、「さらにいじめられる」「解決しない」が令和元年度より17．1ポイント減少しており、話したことがプラスにつながった生徒が大幅に増えていると言える。

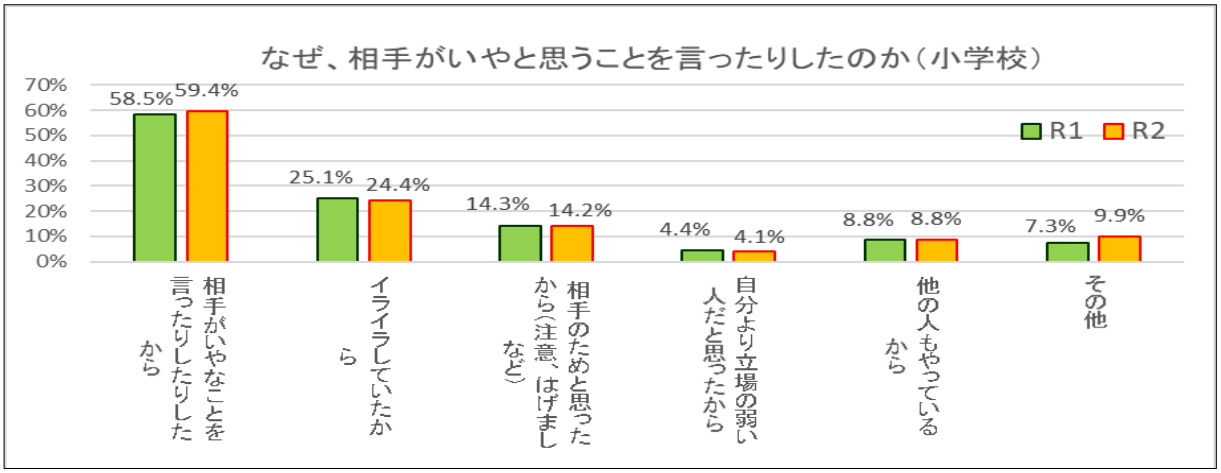
問 12 今の学年になって、誰かにいやなことを言ったり、したりしたことがありますか。



小中学校ともに令和元年度から6ポイントほど減少している。問2の「いじめを受けた」と答えた児童生徒の減少につながっている。

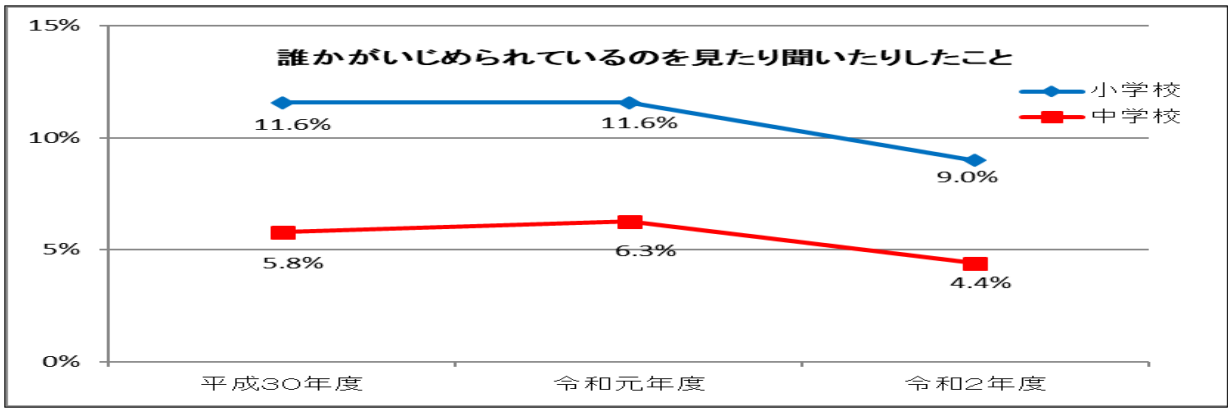
問 13 なぜ、相手がいやと思うようなことを言ったり、したりしたのですか。





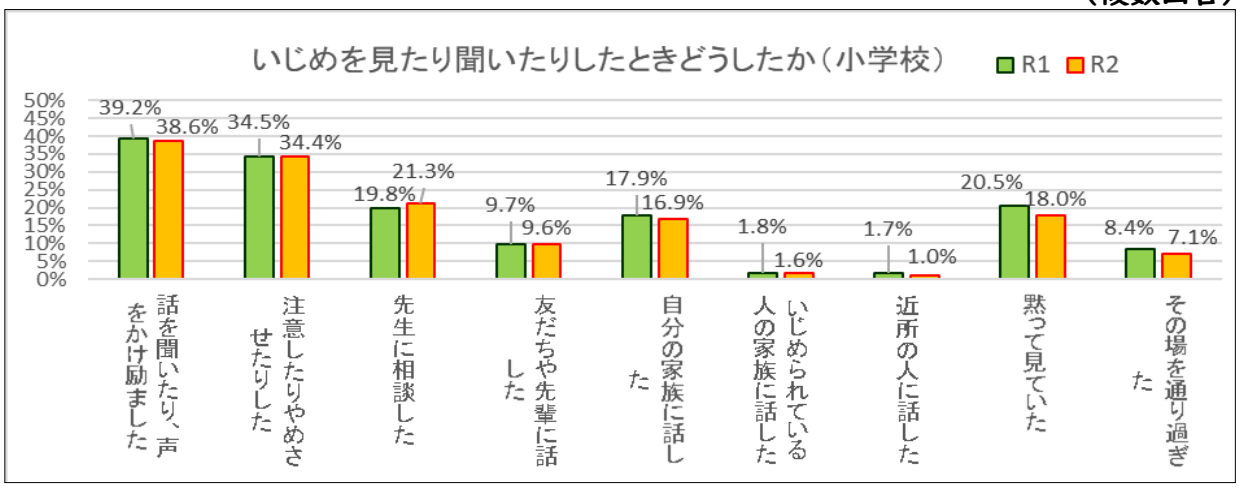
小中学校とも令和元年度とほぼ変わっていない。小中学生の約6割が「相手がいやなことを言ったりしたりしたから」と回答し、続いて 「イライラしたから」となっている。やられたからやり返すという思考やイライラの解消で人に嫌な言動をしているという傾向が見られる。また「相手のためを思ったから（注意、励まし）」については、相手に注意や励ましをしたつもりが聞いてくれなかったため、強く言いすぎたり、特定の人物にばかり注意したりしてしまったものと考えられる。

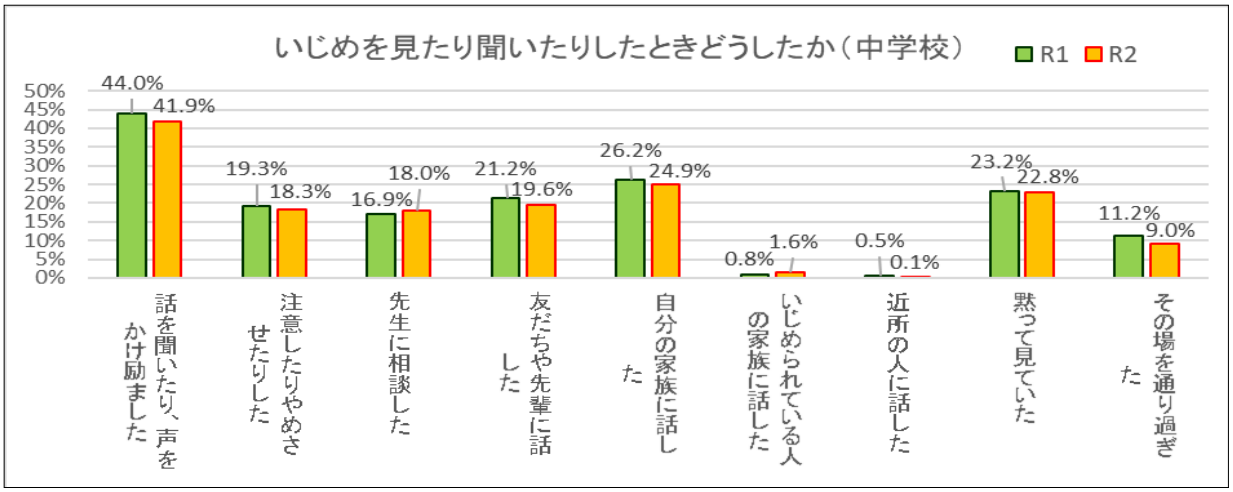
問14 今の学年になって、誰かがいじめられているのを見たり聞いたりしたことがありますか。



小中学校ともにいじめられているのを見たり聞いたりした児童生徒の割合は減少している。これは、問2の「いじめられたことがある」と答えた児童生徒の減少、問12の「誰かに嫌なことを言ったりしたりしたことがある」の減少と関連していると考える。

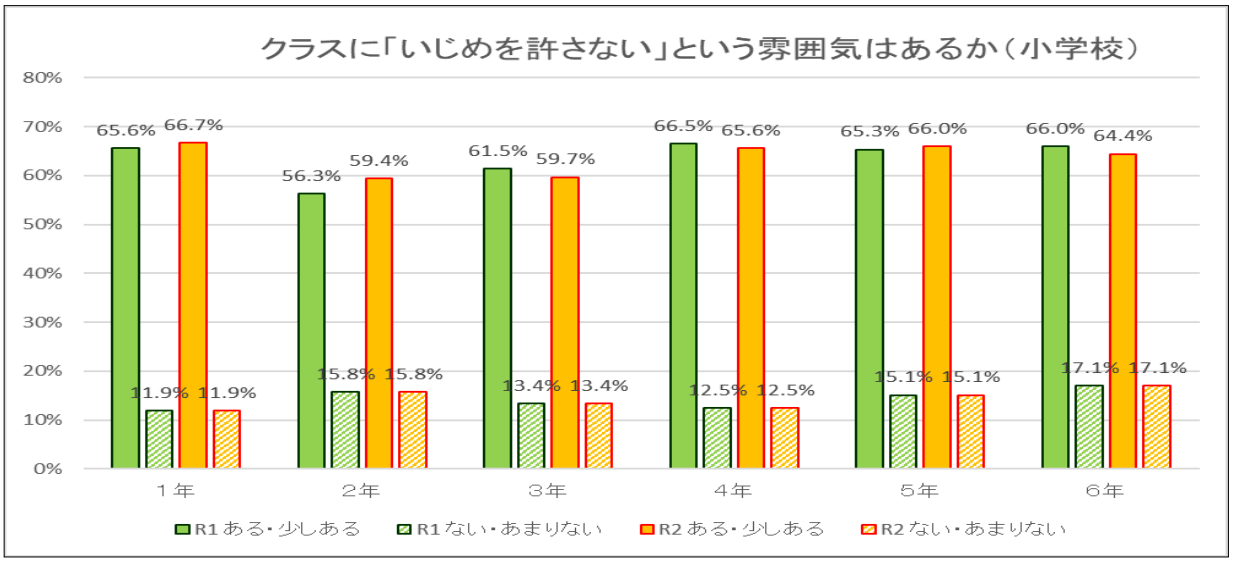
問15 問 14 で「ある」と回答した児童生徒で、いじめを見たり聞いたりしたとき、どうしましたか。（複数回答）

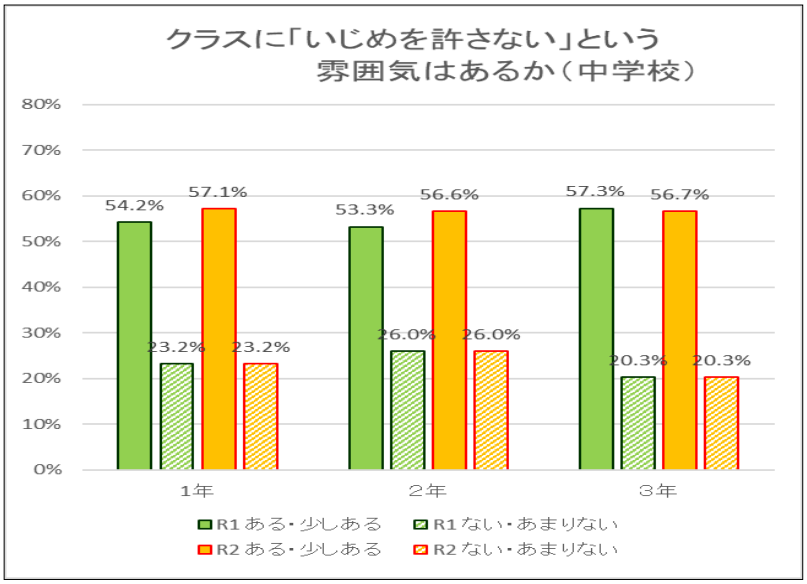




小中学校ともに令和元年度とほぼ変わらず、「話を聞いたり、声をかけ励ましたりした」が最も多い。小学校高学年や中学校では、人の目を気にしたり、自分の立場を考えたりして、相談することも躊躇してしまうところがあると考える。いじめを見たり聞いたりして、「黙って見ていた」「その場を通り過ぎた」児童生徒の割合は令和元年度より若干減少しているが、傍観者的な児童生徒が約3割いる。

問 16　あなたのクラスに「いじめをゆるさない」という雰囲気はありますか。





令和元年度とほぼ変わらない結果であった。日頃から、担任により「いじめを許さない学級」の雰囲気づくりを継続して取り組むとともに、日常の教師の声かけや道徳教育のさらなる充実、また、子どもたちが自分たちでいじめについて話し合ったり、学級のルールづくりをしたりする等の取組もさらに必要である。

問17　あなたはいじめのない学校（学級や部活動・クラブチームなど）にするには、どうすればよいと思いますか。(自由記述)

【小学校】

- ○ 相手の気持ちを考える。（人がされて嬉しいことをする。嫌なことをしない）
- ○ いじめを許さないという気持ちをもって行動する。いじめを許さない雰囲気をつくる。
  （注意する、止める、声をかける、見て見ぬふりをしない、先生に言う　など）
- ○ 優しい言葉（ふわふわ言葉）を使う。
- ○ いじめをなくす話し合いをする。話し合いでルールをつくる。
- ○ 先生や誰か（家族）に相談をする。
- ○ 一緒に活動する、一緒に遊ぶ時間をつくる。
- ○ 話し合って学校（学級）のめあて（スローガン）を決める。

【中学校】

- ○ いじめを許さない雰囲気をつくる。いじめをしないという意識を高める。
  （ダメなものはダメと言う、注意する、止める、傍観者をつくらない）
- ○ 思いやりをもつ。相手を尊重する。相手の立場になって考える。
- ○ ひとりひとりの違い（個性）を認める。認め合う。
- ○ 先生や親、誰かに話す。
- ○ 自分の行動を振り返る。自分の悪いところを見直す。
- ○ 互いのよいところを知る活動を増やす。定期的に行う。
- ○ 定期的なアンケートをとる。アンケートに正直に答える。
- ○ 定期的にいじめについて考える（話し合う）時間をとる。

【アンケートの実施回数】

本アンケートも含めて、学校全体の取組として、いじめの実態把握のためのアンケートは全小中学校において年間10回以上実施している。

5 アンケート結果からみえた課題と今後の取組

(1) 自己肯定感や自己有用感を高める。

自己肯定感や自己有用感を高めるには、三機能（「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」）を生かした学級づくり授業づくりを行う。ICT の効果的な活用を工夫し、教師主導の授業から子ども主体の「学びとる」授業への改革に取り組んでいく。

(2) いじめを許さない雰囲気を高める。

「いじめはいけない」と教師から訴えるだけでなく、児童生徒が主体となって「いじめ」について考える場を設定する。「なぜいじめはいけないのか」「いじめとはどんなことなのか」を学級で議論したり、自分たちの学校や学級の問題点等を出し合ってルールを決めたりする中で、いじめを許さない雰囲気を高めていく。

(3) 発達段階にあった相談体制づくり、話しやすい環境づくりを行う。

小学校では「養護教諭」「担任以外の先生」「カウンセラー」「友達」等への相談が少ない。発達段階を考慮した上で、学校で担任以外に相談できるような組織的な相談体制づくりを行う必要がある。日頃からクラスや学年に問わず、教師が子供たちに積極的に声をかけ、児童生徒と教師が話しやすい関係をつくったり、タブレットの活用等を通して担任に相談したりする等の工夫を行う。学級では話し合い活動等を通して子ども同士で意見や自分の気持ちを出し合える環境づくりを行っていく。

(4) 相談することの大切さを実感させ、自らSOSを出すことの教育を図る。

中学校で「誰にも話さなかった」生徒が2割に減った。また、相談した結果、「ますますひどくなった」「解決しなかった」という割合も約18ポイント減っている。この調査結果のデータを児童生徒に提示し、分析したり議論したりする等、相談することの大切さを実感できる学びの工夫をしながら SOS の出し方に関する教育を行っていく。

(5) いじめをハラスメントとしてとらえる。

いじめは、本人が「嫌な思いをした」「いじめられた」と感じたらいじめと捉える必要がある。まわりの子どもは「遊び」だと思っていても、いじめは本人の受け取り方、感じ方で決まるため、本人の気持ちに寄り添った、共感的な対応が求められる。この点について、再度、教職員や子どもたちに周知していく。